

日々の祈り

2021年7月5日(月)~10日(土)

宮崎中部教会



<はじめに>

それぞれの日々の生活の中で、神さまに心を向け、御言葉を聞き、祈りをもって過ごしましょう。教会のために、兄弟姉妹のために、隣人のために、祈りを合わせましょう。

<用い方>

毎日の御言葉を、可能であれば声に出て、二回以上読んでみましょう。御言葉をじっくりと味わい、聖霊に導かれるままに、祈りの時をもちましょう。

<今週の祈りの課題>

- ・神さまの恵みに感謝し、お応えする日々を歩めるように。
- ・災害などで悲しみや苦しみを覚えている人のために。
- ・宮崎中部教会が、神さまの愛と憐れみをこの地の人々に伝えていくことが出来るように。

5日(月)

ルカによる福音書 15章4節

「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで探し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を抱いて、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。

昨日の御言葉を思い巡らしましょう。神さまは、一人の罪人が救われることを、大喜びなさるお方です。そのためには「見失った一匹を見つけ出すまで探し回る」と言われます。つまり、罪に捕らわれた、たった一人を救い出すためにも、あらゆることをして下さるのです。神の御子が十字架に架けられて死ぬということも、死者の中から復活させられることも、すべてはわたしたちを見つけて出し、御許に連れ帰るためになされたことです。わたしたちと共にあることを、神さまが喜んで下さる。何と嬉しいことでしょうか。

6日(火)

ゼファニヤ書 3章17節

お前の主なる神はお前のただ中におられ／勇士であって勝利を与える。主はお前のゆえに喜び楽しみ／愛によってお前を新たにし／お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる。

主なる神さまは、わたしたちのただ中におられます。この神さまが、わたしたちに勝利を与えて下さり、わたしたちのゆえに喜び楽しんで下さる。愛によって、わたしたちを新たにし、わたしたちのゆえに喜びの歌をもって楽しまれる。神さまの喜びのただ中に、わたしたちは置かれているのです。

7日(水)

イザヤ書 30章 18節

それゆえ、主は恵みを与えようとして／あなたたちを待ち／それゆえ、主は憐れみを与えようとして／立ち上がられる。まことに、主は正義の神。なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は。

主なる神さまは、わたしたちに恵みを与えようとして、わたしたちを待っておられます。主なる神さまは、わたしたちに憐れみを与えようとして、立ち上がって下さるお方です。神さまがこのようなお方でなければ、わたしたちは罪の故に、怒りを受け、見捨てられ、滅ぼされても仕方がないような者でした。神さまは正しさを貫かれます。しかし、神さまが憐れみ深い方であるゆえに、神さまはわたしたちを滅ぼすことで正しさを示されるのではなく、恵みと憐れみを与えて、わたしたちの罪を赦し、神さまとの関係を回復させることで、正しさを貫いて下さるのです。

8日(木)

エフェソの信徒への手紙 3章 12節

わたしたちは主キリストに結ばれており、キリストに対する信仰により、確信をもって、大胆に神に近づくことができます。

わたしたちは深い罪のゆえに、本来であれば神さまに近づくことが出来ないものです。神さまの正しさの前で、神さまの栄光の前で、滅ぼされてしまうような者です。しかし、イエスさまがわたしたちの罪を贖い、わたしたちと一つになって下さった。今やわたしたちを神の子として下さった。そして神さまはいつでもわたしたちを受け入れて下さる用意があり、ずっと待っていて下さいました。だから、イエスさまのゆえに、わたしたちは確信をもって、大胆に神さまに近づくことができるのです。

9日(金)

エレミヤ書 31章 20節

エフライムはわたしのかけがえのない息子／喜びを与えてくれる子ではないか。彼を退けるたびに／わたしは更に、彼を深く心に留める。彼のゆえに、胸は高鳴り／わたしは彼を憐れまずにはいられない／主は言われる。

次の主日礼拝の御言葉です。神さまがわたしたちにどのような思いを向けて下さっているかを、わたしたちは心に留めたいのです。わたしたちの存在を、「喜びを与えてくれる子」だと言って下さる。わたしたちが背き、離れても、そこで更にわたしたちを深く心に留めずにはいられない。憐れまずにはいられない。そう言って神さまは、わたしたちのために胸を高鳴らせ、慈しみの眼差しを常に注いで下さっているのです。この眼差しを、わたしたちは受け止めているでしょうか。

10日(土)

ルカによる福音書 15章 20節

そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。

明日の主日礼拝の御言葉で、有名な「放蕩息子」の一節です。財産を前もって受け取り、それを食いつぶし、行き場所がなくなって帰ってきた下の息子の姿を、父親はまだ遠く離れていたのに見つけました。毎日毎日、帰って来るのを待ち、息子の姿を探し続けていたのでしょう。そして見つけたら、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。この父親こそ、わたしたちに対する神さまのお姿です。